

2024年12月18日

山形大学 IR (Institutional Research) 担当者向け実践プログラム 第6期(2024年度)の実施状況の評価および第7期実施方針について

藤原宏司(山形大学)・山本幸一(明治大学)

2024年12月5日に開催された「山形大学 IR 担当者向け実践プログラム自己点検・評価委員会」において、11月29日開催の修了判定会議の結果、第6期生に実施した「中間面談」および「Exit Interview」の内容、さらに担当講師からの意見を総合的に検討しました。これらの内容をもとに、第6期の実施状況の評価をまとめ、次期の実施方針を策定しました。

1 第6期(2024年度)の実施状況の評価

(1) 募集対象・受講状況

- 本プログラムは、大学等に勤務し、IR関連の業務経験が2年未満の方、あるいは、高等教育に関心があり、今後、大学等の高等教育関連機関で職に就く意欲のある方を対象に実施した。
- 定員は、実技・実習を伴うことなどから、12名程度を上限とし、6名を受け入れた。

(評価)

- ・ 第5期までは、大学関係者(業種:教育・学習支援業)のみの受講であったが、今回は初めて大学関係者以外(業種:複合サービス事業)の受講生を受け入れた。
- ・ Exit Interviewの結果から、講師陣による個々の課題へのコメントや、プレゼンテーションに対する個別面談でのフィードバック等が、引き続き高い評価を得ており、個々の学生に対するきめ細やかな教育を実施することができた。
- ・ オンラインプログラムの特色により、東北地方、関東地方、近畿地方からの受講生を受け入れることができた。
- ・ 応募資格における「業務経験2年未満」という基準は、判断基準が分かりにくいいため、「IR業務に必要な5つの要素を体系的に学びたい方」に変更することが望ましい。
- ・ 本プログラムの本質をより適切に伝えるため、リーフレットおよびホームページにおける内容の更新が必要である。例えば、本プログラムは、高等教育分野をケーススタディとして活用しているが、その狙いは「データの処理・可視化および効果的な情報提供」に関する実践的な学習機会の提供にある。従って、大学関係者に限らず、上記に挙げた知識・スキルの基礎を学びたい方、あるいは既存の知識を体系的に発展させたいと考える方にとっても有益なプログラムであることを周知したい。
- ・ 受講生については、6名から10名程度が効果的な指導に適切である。よって、募集人数の変更について検討する。

- ・ 受講生の募集にあたり、プログラムの趣旨を十分に理解した受講者を受け入れることが重要である。しかしながら、現状の Web サイト「のみ」による周知活動には、受講生の確保に限界がある。この課題に対しては、修了生のネットワークを活用した募集広報活動の展開が効果的と考える。

(2) 到達目標・達成状況

- 本プログラムは、IR 担当者に必要な 5 つの要素（高等教育機関を取り巻く文脈、アセスメント、データマネジメント、データ分析、情報提供（Data Storytelling））に関する基礎的な知識・スキルの習得を目標として実施した。
- 本プログラムは、カリキュラム・マッピングによる科目編成を行い、教育目標である「5 つの要素」に関する基礎の習得を目指している。
- 修了基準は、全科目の履修に加えて、全提出課題および最終成果発表会（IR192：IR プロジェクト（2））における合格判定を得ることである。今期からは、学習の深化を目的として、最終成果発表会における採点基準を詳細化し、採点ルーブリックとして事前公開した。具体的には、「異なる視点の分析を 3 点以上取り入れること」「複数のグラフ・表をスライドに含むこと」等、10 項目である。なお、IR192 における最終評価は、講師陣、外部評価者等 10 名が行った。

(評価)

- ・ 最終成果発表会において全員が合格したことから、本プログラムの到達目標が達成できた。
- ・ Exit Interview の結果からは、受講生の高い満足度が示されるとともに、プログラムの難易度が適切に設定されていたことが確認された。
- ・ 受講生間で、課題の進捗状況に差が生じたことにより、リアルタイム授業におけるグループワーク等の共同学習活動に若干の影響が見られた。Exit Interview においても、この課題が指摘されており、今後は講義の進行状況と連動した適切な課題提出期限の設定が必要である。
- ・ 現在、受講生に提供している「授業進行表」は、講師側の「授業運営スケジュール」としての性格が強いという意見があった。受講生には、毎週月曜日に、課題の締め切り期限を繰り返しアナウンスしていたが、受講生が知りたい情報は単なる期限ではないことが、Exit Interview から示唆された。例えば、R のプログラミング学習において、「第 10 回目の課題は、第 4 回リアルタイム授業までに完了すること」といった、授業進行と連動した具体的な学習期限の提示が必要である。
- ・ Microsoft Teams を活用した相互コメント方式の課題は、受講生から高い評価を得た。しかしながら、課題提出までの期限が約 1 ヶ月ある現状では、課題の早期提出者と締め切り直前の提出者との間でタイムラグが生じ、相互コメントが困難となる。この課題を解決するためには、前項の対策に加えて、受講生間の学習進度における「ある一定の平準化」を図る必要がある。
- ・ 受講生からは、リアルタイム授業における「グループワーク」に対する高い評価が得

られた。特に「IR191_IRプロジェクト1(リアルタイム・データ分析チャレンジ)」においては、1回だけではなく、複数回の実施を望む声が寄せられた。一方で、効果的なグループワークの実施には、受講生間での「Rプログラミングスキル」における習得レベルを一定水準に保つ必要があることも明らかとなった。この課題に対する改善策としては、前述した「授業進行と連動した具体的な学習期限の設定」に加え、「DMA102_Rによるデータマネジメント入門」における確認テストを現行の「2回」から「4回」に増やすことで、受講生の学習進度の平準化を図ることが有効である。

- ・ 課題への取り組みにおいて、受講生間での「教え合い・助け合い」が自発的に行われたことは、本プログラムにおける教育効果を高める重要な要素となった。今期に見られた「学習コミュニティ」の形成をさらに促進するための方策を受講生に聞いたところ、受講生主体のグループワークをプログラム開始直後に実施する、という案が複数人から寄せられた。この提案は、早期からの活発な「相互学習支援環境の構築」に有効だと思われるため、採用したい。

(3) 教育課程(提供科目)・授業方法・講義内容

- 教育課程として、「IR 入門」、「IR 応用」、「データマネジメント&分析(DMA: Data Management & Analysis)」、「IR 実践」の4分野に、「ゲスト講演その他」を加えた体系的なカリキュラムを編成した。各科目は、前出(2)に示した5つの学習目標の基礎を涵養するよう配置した。
- 授業方法は、講義と実習があり、実習では、「R」や「Microsoft Power BI」等を用い、データ処理、データの分析・可視化、プレゼンテーション等の実践を扱った。この他、学習効果を高めることを目的とした「授業時間外課題」を課した。
- 授業形式は、リアルタイム(双方向)授業とオンデマンド型授業を組み合わせたものとした。総学習時間は、リアルタイム授業の実施時間に加え、オンデマンド講義動画の再生時間および講義動画内で指示された演習課題の「標準的な作業時間」を合算して設定した。
- 今期における総学習時間は約100時間であり、その内訳は、講義が約80時間、授業内課題・演習等が約19時間で構成されている。これは第5期と比較して約10時間の増加となり、法律で定められた日米の大学における単位制に換算した場合、2単位(90時間)相当の学習量となる。
- リアルタイム授業では、受講生による「プレゼンテーション発表」と、受講生同士による「各自の発表に関するクリティーク」をメインに実施した。また、別回では「リアルタイム・データ分析チャレンジ」等の実践的なグループワークを行ったとともに、ゲスト講師による双方向的な講演を通じて、より深い学びの機会を提供した。
- 本プログラムでは、IR初級者に求められる基礎的な知識・スキルの習得を目指し、特にデータ処理能力の涵養に重点を置いた。また、データ収集から分析可能なデータセットの作成、そしてレポート作成・プレゼンテーションに至るまでの一連のIR業務プロセスを、実践的な演習を通じて体系的に学習できるカリキュラムを編成・実施した。
- 本プログラムでは、データ分析およびプレゼンテーションスキルの深化を図るため、米国大学における英作文教育の方法論を応用した教育手法を導入している。具体的には、受講生全員が「共通のデータセット」を使ったデータ分析に取り組み、その成果をプレ

ゼンテーション形式で発表する。加えて、学びを促進するため、受講生同士のクリティークや講師からのフィードバックを参考に、受講生自らが改善を加えた「再発表の機会」を複数回、設定した。

- 今までは任意であった個別面談（1人あたり1～2時間）を必修化し、きめ細やかな指導体制を確立した。面談では、プレゼンテーション課題への具体的なフィードバックを中心に、本プログラムへの改善提案の聴取や、各受講生が抱えるIR業務上の課題についての相談支援など、包括的な指導を実施した。なお、社会人学習者への配慮から、最終成果発表会後の個別面談については任意とした。
- 本プログラムでは、「クラスメイトからも学ぶ」ということを受講生に強く推奨している。この「受講生間の相互学習」を促進するため、今期より課題提出方式を変更し、Microsoft Teamsの「コミュニケーションチャンネル」を活用した「課題共有型の学習環境」を構築した。このことにより、受講生が互いの成果物から学び合える機会を提供できた。

（評価）

- ・ Exit Interviewの結果から、プレゼンテーション発表会における同一教材の反復使用等の有効性が確認された。また、受講生間の相互クリティークにより、各自の課題が明確化され、成長のプロセスが実感できたとの評価を得た。さらに、「コミュニケーションチャンネル」を活用した課題共有型の学習環境により、受講生間の相互学習効果も見られた。この提出課題方式の変更に関しては、受講生全員から好意的な意見を得た。
- ・ 今期より必修化したプレゼンテーションに関する中間面談での個別指導については、全受講生から高い評価を得た。また、Exit Interviewの必修化に関する要望もあった。これらの結果を踏まえ、来期以降は、中間面談およびExit Interviewを必修化として、さらなる指導効果の向上を図りたい。
- ・ 提供科目の内容および授業方法については概ね肯定的な評価を得たものの、カリキュラム構成において実技系科目が「授業後半に集中」している点について要改善との意見を得た。よって、実技系科目における実施時期の分散が必要である。例えば、Microsoft Power BI、Rによるグラフ描画、Quartoを使ったレポート作成等における講義開始時期を早めることとする。
- ・ 受講生同士のコミュニケーションをさらに促進するため、リアルタイム授業時における参加型アクティビティの拡充に関して要望があった。
- ・ Rのような、受講生にとっての新規学習項目については、到達目標や最終的な活用イメージを初期段階で共有して欲しいという要望があった。また、Rを使うことのメリットや手作業を多用することのデメリットを体験してもらうことを授業序盤に行ってはどうかという意見が評価委員から寄せられた。これらの要望・意見を参考に、Rを学ぶ動機付けやモチベーションを高める工夫を考えたい。具体的には、DSBC等の複雑なグラフを題材に、まずはRで描画してもらい、次に、エクセルで同様の作業を課す等を考えたい。
- ・ 「IR191_IRプロジェクト1」の授業では、受講生主導のデータ処理作業を基本としながら、講師による適切な介入を組み合わせた効果的な授業運営が実現できた。ま

た、一部グループで実施した対面形式での授業が高い教育効果を示したことから、今後は受講生の地理的条件等を考慮しつつ、可能であれば、対面とオンラインのハイブリッド形式での実施を検討したい。

(4) 受講料

- 受講料については、自己負担した者が一定数いた。

(評価)

- ・ Exit Interviewの結果から、実際の総授業時間（約100時間）に対する受講料の設定については適切との評価を得た。一方で、第6期募集要項に記載された「授業時間である60時間」に対する「受講料が15万円」という現在の表記については、費用対効果の観点から再考の余地があるとの指摘があった。この意見を踏まえ、第7期募集要項においては、実態により即した形で「授業時間を90時間」へ改訂することとする。（受講料は変更しない。）
- ・ 受講料の個人負担者への支援策として、厚生労働省による一般教育訓練給付金の対象講座指定を目指す。よって、この指定要件の一つである「特定の団体等に限らず広く労働者一般を対象としたプログラムである」という基準を満たすため、大学業界以外からの受講生も受講できるよう、募集要項等の大幅な改訂を行う。

(5) 社会人の受講に向けた工夫・配慮

- 第5期（2023年度）から「文部科学省BPプログラム（テーマ：DX）」の認定を受けた。
- 本プログラムの主たる受講対象である大学教職員の実務能力の育成に寄与するため、高等教育やIRの専門家に加えて、本プログラムの修了生を講師として迎え、より実践的かつ現場のニーズを考慮した教育内容の充実を行っている。

(評価)

- ・ 学校教育法に基づく履修証明プログラムとして学長名による「履修証明書」を授与できるIR分野では日本唯一のプログラムであり、受講者に学習歴を明確に示すことができている。
- ・ 完全オンライン実施、また、リアルタイム授業も土曜日（午後）・日曜日（午前）とすることで、受講生の勤務時間に配慮した結果、全国各地から受講生が参加できている。
- ・ 受講支援の形態は、受講生の所属機関によって様々であることが確認された。具体的には、業務時間内での受講を許可するケースや、受講料は所属機関の負担としながらも勤務時間外での受講を求めるケースなど、所属機関により支援体制が異なる。
- ・ 今期より中間面談を必修化した。中間面談の実施にあたっては受講生の都合に最大限配慮したが、来期からはExit Interviewも必修化されることを踏まえ、受講生が所属機関からの支援を円滑に得られるよう、詳細な学習内容および授業スケジュールを事前に提供する。

(6) その他：受講生や修了生へのサポート等について

- 修了生間の継続的な交流を促進するため、メーリングリストと Discord を運用している。メーリングリストは、山形大学が管理・運営を行い、Discord については修了生（第2期）に管理人をお願いしている。
- これらの交流プラットフォームを通じて、修了生にリアルタイム授業スケジュールを案内し、異なる期の受講生・修了生が交流できる継続的なコミュニティを形成している。
- 修了後も継続的な学習機会を希望する修了生を対象に、有償の特別聴講生制度を設けている。本制度利用者には、現行プログラムの全講義資料へのアクセス権限を付与しており、体系的な学び直しの機会を提供している。
- 本プログラムは、正規の面談機会に限定することなく、受講生が抱える業務上の技術的・心理的な悩みに関する相談支援を随時実施している。また、専門性の高い案件については、講師陣のネットワークを活用した適切な助言者の紹介も行っている。このような支援体制は、現役受講生のみならず修了生に対しても継続的に提供しており、第6期実施中においても、第1期、第4期および第5期修了生からの個別相談（休日対応も実施）に対応するなど、長期的な支援を実現している。具体的な支援事例として、同一大学における学部から大学院への進学者を特定するための名寄せプログラム開発支援等がある。
- 本プログラムの修了生複数名が、2024年度に、国立大学の IR 担当者として転職を果たし、新たなキャリアを開始した。

2 第7期（2025年度）実施方針について

(1) 受講対象

- IR 業務の基礎的な知識・スキルの体系的な習得を目指す方々により広く学習機会を提供するため、応募資格から業務経験年数の要件を撤廃する。
- 大学業界以外からの受講を可能とするため、現行の募集要項における応募資格に変更を加える。
(文部科学省 BP プログラムへの変更手続きについては要確認)

(募集要項への記載案)

- ① 現在、大学等の高等教育関係機関に勤務し、IR (Institutional Research) の基礎的な知識・スキルを学びたい方
- ② 高等教育に関心があり、将来、大学等の高等教育関係機関で職に就く意欲のある方
- ③ 意思決定者への情報提供に必要な「データ処理」や「プレゼンテーション」等の基礎的な知識・スキルを、高等教育分野を題材として体系的に学びたい方

意思決定に資する情報提供を行う高等教育機関の人材を「IR (Institutional Research) 担当者」と呼びます。

(2) 募集方法

- プログラム Web サイトおよび募集要項リーフレットにおける内容を変更する。
- 修了生コミュニティを活用して、受講生募集活動を強化する。
- 受講生選抜にかかるルーブリックの開発を行う。

(3) 定員

- 12 名程度から、「8 名程度」に変更する。
(文部科学省 BP プログラムへの変更手続きについては要確認)

(4) 総時間数

- 「60 時間以上」を「90 時間」に変更する。
(文部科学省 BP プログラムへの変更手続きについては要確認)

(5) 到達目標

- 到達目標に関する変更は行わない。

(6) 教育課程・授業方法・講義内容

責任者： 藤原（山形大学）

- 従来の IR 入門、IR 応用、DMA、IR 実践からなる科目群に加えて、受講生への学習進捗の確認と個別指導を目的とした「中間面談」および「Exit Interview」を必修科目に追加する。
- 「教育課程」および「授業進行と連動した具体的な学習期限の設定」について、ガイダンスで詳細に説明する。特に、受講生にとって馴染みのない「R」についての不安を払拭するため「R を学ぶ利点」や「手作業を続けるデメリット」に加えて、本プログラムで「どこまで R を学ぶか」その全体像を早期に共有する。
- 本プログラムでは、受講生間の相互学習（クラスメイトに学ぶ）やクリティークなど、受講者間の主体的な学びを重視している。この教育方針を効果的に実現するため、受講生間のコミュニケーションを今まで以上に促進する。第 7 期は、リアルタイム授業における「グループワーク」において、R に関する相互学習機会を増やすとともに、受講生間の協働関係を深める活動を積極的に展開する。
- 【再掲】「DMA102_R によるデータマネジメント入門」科目におけるグループワークの増加に対応するため、受講生の当該科目に関する学習進捗を揃える仕組みを導入する。具体的には、「中間テスト」と「期末テスト」を分割し、4 回のテスト課題とします。このことにより、受講生の学習進捗をある程度均一化し、効果的なグループワークの実施が期待できる。
- 学習成果をより明確に確認するため、最終成果発表会における採点基準に「R を用いたグラフ作成とデータ分析」を追加する。また「Quarto によるレポートिंग」

のスキルをプレゼンテーションに活用できるよう、関連する授業の実施時期を早める。

- 「R によるデータマネジメント」および関連科目における学習成果を効果的に確認するため、最終成果発表会の実施時期を、現行の「10月中旬」から「11月上旬」へ変更する。併せて、Rの実習に関する「リアルタイム授業」を増やす。(学習コミュニティ醸成への効果も同時に考えての判断)
- 【再掲】「Microsoft Power BI」および「Microsoft Power Query」「Power Automate」等に関する科目をプログラム前半に配置します。これにより、プログラム後半における実技系科目の集中を緩和します。
- 【再掲】 授業スケジュールについて、DSBCに関する学習順序を、Rによるグラフ化を先行し、その後、Excelによる描画法を学ぶ構成とすることで、Rのグラフ作成における利点を実感できるようにする。
- 大学業界に限らないデータ処理・活用に関する実務の理解を深めるため、現行科目である「他大学におけるIR」を縮小し、新たに「プログラム修了生」や「他業種におけるデータ担当者」による「事例紹介・事例報告」を、ショートプレゼンテーション形式で実施する。
- データ処理に必要な、正規表現の基礎的な取り扱いに関する要素を科目内に取り入れる。

責任者： 浅野（山形大学）

- DX推進や業務効率化に資する素養の涵養を目的として、Excelを活用したTips集に関する科目を設ける。これを、プログラムの開始初期または開始直前に提供する。また、このTips集をベースとして、SD等で使用できる教材を開発する。

(7) 受講料

- 受講料（15万円）の変更は行わない。

(8) 社会人が受講しやすい環境への配慮

- 引き続き、完全オンラインプログラムとして開講し、リアルタイム授業は土日を中心に開講する等、社会人が受講しやすい学習環境を提供する。

(9) 修了生ネットワーク

- Discordをメインとし、メーリングリストとの併用で運用する。

(10) 受講生や修了生へのサポート等について

- 引き続き、技術面と心理面の両面から、きめ細かなサポートを提供する。

以上